



毎月十五日発行 発行所 宗像大社 宗像大社 宗像大社 宗像大社

神具 装束 結婚式場用品 本社 九州店 福岡市博多区長門町二丁目一〇二番

昭和59年 皇紀2644年甲子 新しき年に祈る 一初詣での人と車の波一



昭和五十八年が終りを告ぐ。皇紀二千六百四十四年。甲子の年。神の恵みと祖先の恩とに感謝し、

一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと。

二、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと。

一、大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること。

「家」精神の昂揚を

経済企画庁が発表した本年度(昭和五十八年)の「国民生活白書」によると、近年は社会経済環境の変化からわが国の「家族」のあり方に大きな変化が生じ、とくに核家族化、都市化に伴ふ家族機能の弱体化が懸念されるやうになつたとして、家族の意義や役割の再確認がよびかけられている。

核家族化は、平均世帯人員数が昭和五十八年には三・一人を割り、このまま進めば昭和七十五年には三・一人に達するであろうと予測されている。このことは、主婦の職場進出の問題とも相俟つて、本来「家族」の内にある相互扶助の家族機能に避けがたいひずみをもたらしている。

西洋流の「個人主義」の思想は、経済的理由からばかり起こつてきているわけではない。そこには親や祖父母が有形無形に体得する貴重な生活の期待が、親の手ぶりや家のしきたりを通じて、子や孫に伝へられ、そこに「家」の精神の脈々たる継承発展が期待されている。

今日の日本人一般の経済的条件は、必ずしもその三世同居の容易な実現を許さないとしても、その精神はしっかりと自覚される必要がある。そして、神が中心になつて伝統の「家の祭り」を執り行つていくのが、誰かの責任ではなく、親の面倒をみるのが誰の責任でもないことである。

その家族制度の変革は、しだいに「家」の精神を醸成することとなつた。そして経済社会の近代化とともに今日の核家族化の状態に至つたと見てもいいが、しかしもちろん、日本人すべてがそのやうな核家族化のあり方に満足してゐるわけではない。

白書が指摘するやうに、たしかに最近のわが国の「家族」のあり方には大きな変化が見られる。都市化および核家族化と高齢化、そして女性とくに主婦の職場進出がその代表的なもので、それらから次々に見のがせぬ重要な諸問題が派生してゐる。

しかしこのやうな家族のあり方の変化、換言すれば家族機能の弱体化の現象は、何も最近になって突如として生じたものではない。近年の経済社会環境の大きな変化がその家族機能の弱体化を顕著にしたことは疑ひないが、その前に、日本人の家族観から戦後して「家」の精神が失はれつつある実情をこそ、われわれは重視し、憂ふべきである。

周知のやうに日本は戦後の占領下、三世帯同居の思想は、もちろん単に「家」の精神を醸成することとなつた。そして経済社会の近代化とともに今日の核家族化の状態に至つたと見てもいいが、しかしもちろん、日本人すべてがそのやうな核家族化のあり方に満足してゐるわけではない。

今日日本人一般の経済的条件は、必ずしもその三世同居の容易な実現を許さないとしても、その精神はしっかりと自覚される必要がある。そして、神が中心になつて伝統の「家の祭り」を執り行つていくのが、誰かの責任ではなく、親の面倒をみるのが誰の責任でもないことである。

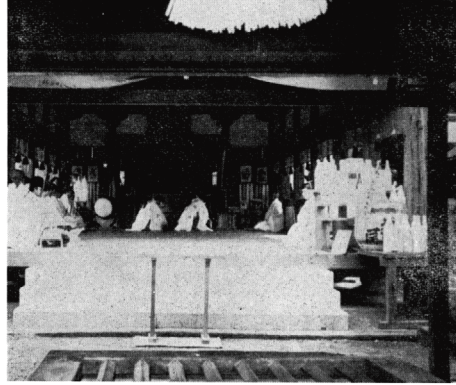
今日日本人一般の経済的条件は、必ずしもその三世同居の容易な実現を許さないとしても、その精神はしっかりと自覚される必要がある。そして、神が中心になつて伝統の「家の祭り」を執り行つていくのが、誰かの責任ではなく、親の面倒をみるのが誰の責任でもないことである。

第二七一回 宗像大社歌会詠草

田熊 今村 重刀 大島 佐藤 八郎 時化あがり岩場に集う鳥の群は羽根をひろげて冬の日に浴を浴びて

宗像大社正月諸祭 献米奉告祭齋行

宗像大社では、元旦祭から始まって、新年大祭と続いて、一月十日に境内末社恵比須神社祭、同十三日に献米奉告祭等、正月の恒例の諸祭が相ついで齋行された。



新春の一月十三日、午前十一時から恒例の献米奉告祭が厳肅に齋行された。尚祭典終了後に鏡餅開きが行われた。

この献米奉告祭は旧年未だに宗像市町村の氏子により奉獻された新米を神前にお供えし、五穀豊穡の神恩を感謝申し上げるとともに、氏子の皆様の豊作と無病息災を祈念するお祭りであり、

当日は、寒さも厳しかったが、山本三吾子会長を始め遠近から多数の崇敬者が参列し、祭典は厳肅に行された。

この献米奉告祭と春秋の二大祭には、宗像市・郡内の各校区の代表者が、各々交代で奉幣使を務めることになっており、本年は、福岡町の当番にあたり四角校

国の宝を守りましょう ——文化財防火デー——



去る一月二十五日、午前十時当大社の本殿裏の森(高宮 第二・第三宮に行く参拝道筋)より火の手があつたと言ふ想定のもとで、当大社自衛消防団と地元玄海町消防団第一分団と

火相定より、先づ施設消火栓が出水するまでに、巫女等によるバケツリ消火、地元消防団(第一分団)がかけつけて応援消火にあつた。訓練は約二十分間で終了したが、初期消火がいかに大切なことであるか、しみじみと身をもって体験した。

その後消火器の取扱ひ方について、指導と実施訓練が行われた。

区の楠田繁男氏が選ばれ奉仕された。引続いて齋館に於いて鏡餅開きが行われた。

この行事のいわれは、「鏡餅は新年を迎えるにあたり各家庭で餅であるが、丸い大きな餅であるが、一鏡は昔は金属で出来た円盤であつたので、これを持って祝いの餅と伝えられてきたのである」と伝えられている。

この餅を食べることを「餅を祝う」とか「雑煮」を祝うとか「雑煮」を祝うとかいふのは、鏡餅を神聖視し特別な晴れの日の食べものとして尊んで来たことを意味している。

当日「雑煮」や「しるこ」として約千個余が用意され、参列者や神社職員がそれを一同古つみを打ちながら食べた。

尚、年末に奉獻された「米」は、毎朝の日供祭に神饌として神前にお供えされ、氏子の皆様の安全と弥による合同防火訓練が行われた。

これは、去る昭和二十四年一月二十六日に法隆寺金堂が焼損したことを機として、国の文化財防火デーが始められて、今年で第三十回目を迎えた。

去る一月二十五日、午前十時当大社の本殿裏の森(高宮 第二・第三宮に行く参拝道筋)より火の手があつたと言ふ想定のもとで、当大社自衛消防団と地元玄海町消防団第一分団と

「恵比須神社祭」

恵比須神社祭は、地元商工玄海町支部(会員約三百十名)の主催で、去る一月十日、「十日恵比須」に一年一度行われて、

当日、会員が三々五々と境内の軒子神社(石祠)前に参集、午前十時から神職二員奉仕により厳肅に齋行された。

祭典終了後、神前に於いて神酒拝戴、恵比須祭の神札を全会員が授けられ、今年の高元繁昌を祈念しつつ帰られた。

去る厳冬の二月六日、午前十時半から、稲荷神社(十四チーム)が参加して行なわれた。

B&G玄海海洋センター前をスタートし、宗像大社神門前をゴールとする八区間、約五・六kmのコースで行なわれた。

稲荷神社は、衣食住の祖神で、五穀豊穡・商売繁昌と農工商を御守護する神さまとして、庶民の崇敬が最も篤く、一般にこの日は、全国津々浦々の稲荷社で祭典が齋行されている。

「古札焼納祭」

去る一月十三日、午前十時から古札の焼納祭が、当大社境内に設けられた斎場(斎行)で厳肅に齋行された。

この祭典は一般に「古札焼納」と言われるもので、今まで皆様の各々家庭の神棚にお祀りされておられた古札や正月の神飾・福・福等を焼納しお返しをする神事である。

この「派司員塚」は、旧期の土師器が主体で、90パーセントを占めているようである。

出土品は細片化した破片が多く、そのほとんどが壺との間に低地帯が続く。これは釣川東部の江口の集落部で、やや開張りの長手の

部で、やがて高坪・塊が壊等が出土し、土師器も多く、数的に少ない須恵器沼を構成していたと考えられる。

宗像誌に詠草を投稿された方は全て会員とみなしておられます。その他個人会御希望の方があればどなたも御入会できます。

玄海町駅伝大会

水雨降る去る一月十五日玄海町成人祝賀駅伝大会に十四チームが参加して行なわれた。

成績は左記の通り
1位 田野チーム 58分16秒
2位 田島・多礼チーム 59分02秒
3位 上八チーム 59分14秒
4位 池田チーム 59分16秒

個人賞(区間賞)として1区(8区間)ごとに各々賞されたが、惜しくも田野チームにおさえられ破れた。

宗像誌に詠草を投稿された方は全て会員とみなしておられます。その他個人会御希望の方があればどなたも御入会できます。

詳しくは、本号四頁をご覧ください。問い合わせは、宗像郡玄海町田島 宗像大社社務所内 歌会係 電話〇九四〇〇二二二一

古代史探訪 (7) 浜宮貝塚

法も取り入れた、漁労集団が採集生活を行なっていた、共同社会生活の場であったことがかかっている。

貝塚の前面は、海岸砂丘の間に低地帯が続く。これは釣川東部の江口の集落部で、やや開張りの長手の部で、やがて高坪・塊が壊等が出土し、土師器も多く、数的に少ない須恵器沼を構成していたと考えられる。

東側にて
〇〇メートル
向かうと、宗像での最大の河川の釣川河口部にいきあたると。

この貝塚は、標高二〇メートルを測る丘陵砂丘状の地帯に広がるが、東西八〇〇メートル、南北一〇〇メートル、広い範囲に貝類と土器類が多量に分布し、馬蹄型を呈している。

の最高部には、「木皮の社」と呼ばれている。「浜宮」の小祠がまつられている。丘陵部は松の木と雑木類とが繁茂しており、南側を下っていくと、水田と若松、津屋崎線の奥道へ向い釣川を中心とした平野部を見渡せる。

昭和四十六年の「筑紫野史学会」が貝塚の北側掘削のトレンチを入れた。部分的調査によると、深さ三メートルで地盤に達し、平行的に約七層の砂層からなり、出土遺物は古墳時代後期の近くに「新波止貝塚」(神波字新波止)もかつて存在していたが、現在は完全に消滅している。



宗像大社歌会 俳句作品集(三)

福岡 広渡一寿軒
初免許無事に通りぬれ
八幡西 磯谷 緑雨
寒椿活けし客間に招かれし
田熊 力丸 一郎
柏手の二の音芽えて初雪
鐘崎 岩瀬 辰夫
年賀状文けはと祝洗ひけり
田熊 安部 ゆき
白髪増え夢絶やすまじ初鏡
東京 白木 静江
初晴れの門に日の丸掲げけり
藤沢 井上 玄洋
日一日色増す梅の蕾かな
香椎 板矢クニコ
みあれ祭昔をしのぶ絵巻物
福岡西 入江 文子
新年やおしどり夫婦句が上手



福岡中央丸ゆずる
ささ波の透きし真砂に日脚
津屋崎 井浦 良介
梅の香の庭の広さよ酒断ちて

玄界沿岸地名探訪

いししいただし

はじめに

今回から玄界周辺の地名を探訪してみたいと思っております。記すまでもないことですが、民俗学者で、日



玄界沿岸の風景

地名は日本列島の先史時代から存在したことは確かです。しかし先史時代の土器や石器と地名が本質的に異なるのは、どこでございましょう。石器や土器などの道具は、時代が過ぎれば、不用のものとなるのに対して、地名は先史時代あるいは記・紀・万葉の古代の人々が使用したものに、そのままだよもコミユニケーションの道具として使用しているという事実です。これは一見ありふれたことのように思えますが、実は驚くべきことなのです。つまり、私達は千数百年昔の先達の言葉にこめられた感情を、地名を通して追体験することが出来るのです。先史時代あるいは古代から今日まで、同じ地名で、同じように使われている文化遺産を地名の他に発見することが出来るというように思っています。

沖ノ島神宝の意義

これから先、将来もさらに多くの人々の厚い信仰によって、永く保護されていくであろう沖ノ島は、今日までに建造された高床式倉庫で、一般に「海の正倉院」として知られ、その呼び名ならぬ校倉造の倉であり、世品の宝庫としても永く守り、守り伝えられてい

文化財についての考え

「正倉院」とは、正統院ともいわれる。本来は古代天皇の遺物や貴重品を納めた倉庫が設置された区域をそう呼んでいたが、いま正倉院といえは、諸宮殿類などの国家の珍宝が、長く勅封で完全に管理、保存されてきている。こ

の正倉院には、奈良時代および中国の唐時代に作られた、世界でも類をみないような貴重な品々が数多く収められており、当時の社会生活へかかえり研究する資料庫でもあるし、また伝世品の宝庫としても永く保存されてきている状態を、誰言うこともなく、神の島の別名として、現代風の感覚で「海の正倉院」と呼ばれている。沖ノ島は先史時代の調査及び資料発表により、その場のそ奉獻品として、沖ノ島が持つ不滅の神祕さは、永遠に続いていく。祭神奉獻品より、祭神を祀ることに、非を新たに問いかけてきて

宗像大社歌会のお知らせ

宗像大社歌会では、会員相互の親睦と研鑽を目的として、「互選会」を毎月一回左記要項にて開催致しております。各位置奮って御参加下さいますよう御案内申し上げます。

〔互選会〕

- 一、開催 毎月一回、第三土曜日、午後二時より
- 一、会場 宗像大社齋館
- 一、会費、資格 会費不要、資格は不問、どなたでも自由に参加出来ます。
- 一、講師 当大社歌会講師 中村吾郎先生
- 一、投稿の切日 毎月一日、尚、互選会詠草と明示下さい。
- 一、兼題 本年度中は「雑詠」とします。

〔宗像詠草〕

毎月本誌に掲載しております「短歌・俳句」の「宗像詠草」も投稿の切日が毎月一日です。おはやめにおだし下さい。尚、宗像詠草と明示下さい。

おましがいのないようお願いします。

詠草 一人一首、「楷書」でお願いします。

用紙 ハガキ可、但し、「互選・宗像詠草」

「俳句」とは、きりり明示して下さい。

一面より つづく

福岡 山本 夏枝
冬日さす水の少き野の小川
魚あまたる静かにおよぐ

津屋崎 高田マサ子
こぼれ陽を求めて開く弁当
の味なつかしむ子の年の春

原町 中村 幸
先夫の横に埋めてくれと遊
きたりしきみのころを思ひ
きむ

福岡 二宮 未子
年惜しむ苦き葉を眺めつつ
目をつむりて一息にのむ

宮田 片山 朔子
幾度か訪ねし呉の街並を文
友といゆけば弾みくるもの

津屋崎 内田 久美
山路ゆく吾が前を囁かあし
しども幼き状にとびゆく愛

古賀 吉武 邦夫
幼われを女工ら遊ばせられ
たり石割場いま神主住め

深田 中野 節子
恰好よき女の足に坐り肝脈
見たりき街にバスを待ちつ

神 湊 石丸 園子
温かき部屋出づるなく興の
なきテレビの前にひととす
ごせり

上 八 占部 元子
遠く見るわが湯川山は紫に
その山巒の神々しかり

田野 山口 和江
段畑のちぎり残せしみかんの
実シグナルのごと鮮に見ゆ

福岡 松尾 和子
年賀状したためおれば名簿
より消し去りし名の二人ふ
えたり

田野 山口 タキ
書き終へて眺むる紙面のペ
ンの文字あえいるなりいか
んともせ

田 占部 ユサ子
はきよせし落葉の上にする
じるとゆうへの雪の降りつ
もり居り

田島 田中ツタエ
明け初めの古式まつりの太
鼓なり寒風つきて師走の道
を

田野 森 つるの
粉雪の舞ふ年の瀬の緑に
障子張りおる指の凝(こ)こ
る

江口 小林万里子
あん餅を盗み食いしぬ飼猫
の初正月の顔ふておし

田 久 加来 幸夫
湯につかり心経となえい
る吾に幼き孫のまなこ張り
つづく

神 湊 葉山 道子
初春の宮の露店に求めたる
キウイ苗植う二才の孫と

池田 田浦タキ子
作付けのみかん摘み終え帰
り来し宵のテレビに聖夜の
曲きく

大井 吉田 和子
博多港の貯木場に人のかけ
を見つ整然と丸太潮に揺れ
をり